

明示的ではない否定的評価の表現の方法

— 日本人大学生同士の会話資料から —

関崎 博紀

1. はじめに

評価という行動は、「特定の事柄に対する話し手の価値観を表すこと」(Martin&White 2005, 筆者訳)であり、それを適切に行うことができるか否かは、相手との心的距離に影響する。特に相手进行评估することは、人間関係を築き上げるうえで極めて重要な働きを持つ。それゆえに、これを十分に習得できないことは、学習者に大きな不利益となる。このような評価という行動の全体像を明らかにするためには、肯定的な評価と否定的な評価という双方の分析が不可欠である。しかし、肯定的評価である「ほめ」に比べて、否定的評価についての研究は未だ多くない。また、評価の発話は、常にはっきりと明示的になされているわけではない。中には、相手に対する配慮として評価をほのめかすような、明示的ではないものもある。日本語学習者が、母語話者の発話の意図の理解をより深めることと、相手に対する適切な配慮を表した発話を形成するために、このような発話の特徴を明らかにすることは不可欠である。しかし、そのような研究は、筆者の調べた限り見当たらない。

そこで、本研究では、否定的評価の特徴を明らかにする一端として、会話の相手やその行動、発話、認識、及び、相手が好意を抱いている人物、ものごとに対する否定的な評価の発話のうち、明示的ではないものの表現方法を分析する。

2. 先行研究の概観と本研究の分析対象の位置づけ

否定的評価の発話に関連した研究は、いわゆる悪態や悪口、罵りなどに関するものが多い。これらには、内省や聞き取り調査といった方法によって、語彙や表現を取り上げているものが多い(筒井 1967, 山田 1985, 室山 2001など)。

一方で、これらの表現を使わずに相手に対する評価を表す発話もある(Goodwin & Goodwin 1987, Martin & White 2006)。否定的評価におけるこのような発話は、ポライトネス理論(Brown & Levinson 1987)から見ると、オフ・レコード(off-record)に該当すると考えられる。オフ・レコードとは、発話の意図を明示しない方策であり、聞き手がもつ他人に邪魔されたくない、立ち入られたくないという欲求であるネガティブ・フェイス(Brown & Levinson 1987)を脅かす度合いが低いものである。否定的評価の表現を明示的に用いていない発話の場合、そのような評価を抱えていることが明示的ではない。その点で、立ち入られたくないという相手の欲求に配慮していると言える。

では、それはどのような方法によって表現されているのであろうか。日本語学習者が実際のコミュニケーションにおいて相手の意図を適切に理解するためにも、また、相手を否定的に述べる際に配慮を適切に表すためにも、このような発話の表現方法に関する知識が必要である。明示的ではないがゆえに、気づかれにくいものであり、表現の方法を明らかにしておく必要がある。しかし、実際の会話においてどのような表現方法がとられているかを明らかにした研究は、筆者の調べた限り見当たらない。

3. 方法

本節では、まず会話資料の概要を示す。続いて、否定的評価の発話の明示性ということについて述べ、会話資料から否定的評価の発話を抽出する方法を提示する。

3.1. 会話資料について

本研究で用いる会話資料は、2003年6月から9月にかけて録音した。非常に親しい同性かつ同年齢の日本語母語話者の大学(院)生が参加した協調的な二者間会話である。会話は、1会話20分程度で、男性ペア、女性ペアとも各10組、合計20組を収集した。会話収集の際には「こんな機会だから言える、普段相手に対して抱いている印象」話題を設定した¹⁾。会話の場所は、最もリラックスできる場所として協力者自身に指定させた。会話終了後、フォローアップ・アンケートを実施し、協力者同士の親しさや会話の自然さを確認してある。この会話を、宇佐美(2003, Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)に従って文字化した。その結果、1会話の平均発話文²⁾数は、710.3であった。

3.2. 否定的評価の発話の明示性

相手を否定的に評価する発話には、否定的評価の意味を持った語彙、表現を含んだものと、そうではないものがある。前者を明示的な否定的評価と呼び、後者を明示的ではない否定的評価と呼ぶことにする。本研究では後者を分析するが、区別のために、前者についてまず触れておく。

明示的な否定的評価は、以下の表現を含んだものとする。否定的評価の意味を持った語彙・表現、「～なくてもいい」などの評価のモダリティ(日本語記述文法研究会編 2003)の表現、否定形(否定の助動詞「ない」を用いて相手の発話内容を否定するもの、命令形、禁止形、「～んじゃない」という文型)である。

本研究で分析する明示的ではない否定的評価の発話は、上記の語彙、表現を含んではいないが、実際には相手を批判、非難、注意など機能や、相手に同意しない機能を持った発話である。

3.3. データの収集方法

上述の文字化資料から、会話の相手やその行動、発話、認識、及び、相手が好意を抱いている人物、ものごとに対する発話のうち、相手を否定的に評価したと判断できるものを抽出する。抽出の基準は、発話文に、3.2で述べた否定的な評価の語彙や表現があること、もしくは、実質的に否定的に評価しているという機能が認められること、という2つである。抽出した否定的評価は、発話文ごとに集計した。下の例1⁹では、否定的評価の発話文が2つあると集計する。

例1 否定的評価の集計方法の例。相手の印象を話している場面。

→1 M03 思いやりが足りないく笑いながら。

2 M04 ははははははく大きな笑い。

→3 M03 デリカシー不足かな。

この作業の結果、274例の否定的評価の発話文が確認された。本研究では、このうち実質的に相手を否定的に評価する機能があるというように、筆者と分析協力者によって判断された227例を分析する。否定的な評価の意味を持つ語彙や表現が含まれていても、実際には助言や相手の話を聞いていることを示すなどの機能が中心的で、相手を否定的に評価しているのではないと判断された47例は、今回の分析の対象からは除外する。

4. 結果と分析

本節では、まず明示的な否定的評価と明示的ではないものの分布を示す。続いて、明示的ではない否定的評価の表現方法について、データを分析した結果明らかになったものを提示する。最後に、それぞれの方法がどの程度見られたのか、数量を示す。

4.1. 否定的評価の発話の明示性の分布

表1に否定的評価の発話の明示性の分布を示す。

表1. 否定的評価の発話の明示性の分布

	頻度	%
明示的	143	63.0
明示的でない	84	37.0
合計	227	100

表から分かるように、明示的な否定的評価が明示的ではないもの比べて多く見られた。しかし、明示的ではないものも37.0%見られることが分かる。

4.2. 明示的ではない否定的評価の表現方法

データを分析した結果、明示的ではない否定的評価の表現方法には、以下の7つが見られた。それぞれの方法については、順次具体例を挙げながら分析していく（以下、「話し手」とは評価の発話をした側を指し、「聞き手」とは評価される側を指すものとする）。

1. 感情の表明
2. 話し手自身の状況を述べる
3. 否定的に評価する根拠となる事実・状況を指摘する
4. 否定的に捉えた行為の言語化
5. 明示的な表現の繰返しを避ける
6. 疑問詞での言い換え
7. 例え話

感情の表明

話し手の感情を表明するものである。例2は、英語の教員を目指している M01 のために、M02 がしりとりで英単語を学ぶという学習方法を紹介している場面である。M02 は自身の体験を踏まえ、それが楽しく学習できる優れた方法であることをM01に同意を求めている(14)。それに対して M01 は「ふーん」とだけ述べている(15)。これが M02 の考えを否定的に評価したものであることは、続く会話から明らかになる。M02 は続けてクロスワードによる学習方法に言及する(19)が、M01 は「あれはいいね」としりとりとは対比的に述べて、クロスワードの効果には賛同している(20)。このことから、15行目における M01 の「ふーん」は M02 の提案に対する否定的評価であり、そのことを理解したM02が別の方法を提案していたということが読み取れる。

この表現方法は、相手による提案や相手のための情報提供の後など、同意や賛同が期待されている場面で見られた。

例2 「感情の表明」による否定的評価の例。

1 M02 おれ、中学んとき、すっげー楽しかった、英語しりとり。

2 M01 あーあーあーあー、単語で？。

3 M02 うん。

4 M02 パン、パン、エッグ ‘egg’、パン、パン、グッド ‘good’ って、
パン、パン、デーイ ‘day’ っって、パン、パン,, [『パン』は
手を叩く音]

5 M01 あ,,

6 M02 イエスタデイ ‘yesterday’、パン、パン、イエロー ‘yellow’、
パン、パン。[『パン』は手を叩く音]

(7行省略)

14 M02 いいでしょ。

→15 M01 ふーん。[そっけなく]

16 M01〈笑い〉。

17 M02〈笑い〉。

18 M02 おれは一、また、ほ、すごい緊張感あったけど(うん)、今とな
っちゃー、でも楽しかったなって。

19 M02 あと、クロスワードみたいなやつやってた。

20 M01 あー、あれはいいね。

話し手自身の状況を述べる

相手について述べるのではなく、話し手自身の状況を述べることを通して相手を評価するものである。例3は、M15とM16が共通の知人が口が軽いことについて話している場面である。M15は、別の知人に最近彼女ができたことを、「人名5」に話してしまったと述べている(1)。それについて、「人名5」は口が軽い(2, 3, 4)ために、口止めをしておく必要があると話している(5)。そのように口が軽い人間であるために、M15はそれまで知人の交際のことを黙っていたのだが、飲み会の席でそれを話したときに、「水臭い」と言われたことを述べている(6)。それを聞いたM16は、「うーん、おれ何も聞いてないから」と述べている(7)が、この発話は、M16が自分も同じように口が軽いと思われていたのではないかということを表した非難となっていると考えられる。そのことは、その発話を聞いたM15が「M16も隠してたじゃん」と述べ、相手も同じことをしたと言いつけているところから判断できる。ここでのM16による非難の発話は、「水臭い」「ひどい」「冷たい」などの明示的な語彙を使わず、「自分が何も聞いていない」という状況を述べることを通して、相手の行動を否定的に評価したものである。

この表現方法による否定的評価は、後の4.3で示すように多くは見られなかった。他には、相手が楽しみにしている飲み会への不参加を表明するものがあった。

例3 「話し手自身の状況を述べる」ことによる否定的評価の例

- 1 M15「人名5」とかにもさ(うん)〈軽い笑い〉、言っちゃっててさ、
軽い笑い〉、もうすでに(〈笑い〉)〈笑い〉。
- 2 M16「人名5」はな(〈軽い笑い〉)、ここ一番で言うからな、
- 3 M15 そう〈そうそう〉|〈笑いながら〉〈2人で笑い〉。
- 4 M16〈みたいだね〉|)〈笑いながら〉。
- 5 M15 ちょ、ちゃんと口止め(〈笑い〉)しとかないと怖いんだよね。
- 6 M15 なんか、前、「人名5」と2人で飲んでてさ(うん)、うん、それ
を、話したらさ(うん)、あの『M15 あだ名、みじ、みずくせ
ーよ』とかい〈笑い〉。
- 7 M16 うーん、おれ何にも聞いてないからー(〈笑い〉)。
- 8 M15「M16 あだ名」も隠してたじゃん〈若干笑いながら〉。
- 9 M15 あ〈一の、彼女のこと〉|)。
- 10 M16 〈あー、まあ〉|)ね。
- 11 M15 うん。

否定的に評価する根拠となる事実・状況を指摘する

相手を否定的に評価する根拠となる事実や状況を述べるものである。根拠には、客観的な事実と主観的に認識している状況が含まれる。例4は、会話の冒頭部でのやりとりである。勉強に忙しいM03は、会話の録音に参加したことについて「くだらない」と述べている(3)。それを聞いたM04は、その発言が録音され後から筆者に聞かれることに配慮し、「くだんねー、って録音されてる」と注意している。この発話が相手に否定的な態度を表したものであることは、それを聞いたM03が非を認めて謝罪している(5, 6)ことから分かる。ここでM04は「やめろ」「だめだ」など、明示的な否定的評価の表現を述べず、「録音されている」という事実のみを指摘して、否定的な評価を伝えている。

この表現方法は、相手に普段抱いている否定的な印象を述べる場面、

相手の提案や同意要求の発話が見られた場面、例4のように常識から逸脱していると捉えられる行動の後などに見られた。

例4 「否定的に評価する根拠となる事実・状況を指摘する」ことによる否定的評価の例。

- 1 M03 こんな、勉強しなきゃいけないのに。[この間、M04 は笑っている]
- 2 M04 おれ、レジユメ打たなきゃいけないのに<笑いながら>。
- 3 M03 くだんねー<2人で笑い>。[テーブルを叩きながら]
- 4 M04 くだんねー、って録音されてる>|<笑いながら>。
- 5 M03 <はい、はい>|、はい。[この間、M04 は笑っている]
- 6 M03 失礼。[この間、M04 は笑っている]

否定的に捉えた行為の言語化

相手の言い間違いを繰り返したり、失敗や否定的に捉えた行為を言葉にしたりして指摘するものである。例5は、話しながらM05がサークルの先輩の実名を出してしまった場面である。これを聞いたM06は「名前出したな」と冷たい口調で述べている(5)。これが批判となっていることは、それを聞いたM05が「別にいいじゃん」「ばれんし」などと自己弁護する発話をしている(7)(8)ことから分かる。このことから、「名前出すな」「やめろ」「やばい」など明示的な表現をせず、その行為を指摘することが否定的な評価を伝える表現方法として利用されていることが分かる。

この表現方法が用いられたのは、相手が言い間違いをした場面や、例5のように倫理的に逸脱した言動を思わずしてとった場合、相手が気づいていない習慣や言行の不一致を批判的に指摘する場合などであった。これらの多くに共通するのは、相手が意識していない点を指摘するということであった。

例5 「否定的に捉えた行為言語化」による否定的評価の例

- 1 M05 「人名1」さんみたいに(〈大きな笑い〉)。
- 2 M05 〈笑い〉 あれはちょっと意識過剰,,
- 3 M06 〈けん〉〈|〈笑いながら〉)。
- 4 M05 〈かも〉|}知んないけどさ。
- 5 M06 名前出したな。「冷たい感じで」
- 6 M05 え?。
- 7 M05 別にいいじゃん。
- 8 M05 ばれんし。

明示的な表現の繰返しを避ける

先行する明示的な否定的評価の表現を繰り返すことができる状況でそれがなされず、非明示的になされているものである。例6は、F01が相手の印象を述べた直後のやり取りである。冒頭部、F01はF02のことを、「結構ばかだ」と述べている(1)。それを聞いたF02は、驚いたり確認したりして、「ばか」と言われたことをしきりに気にしている(2, 4, 7, 13)。それに対してF01は、発言を撤回するのではなく、「そう」と述べ(8, 11)、相手がばかだということを再度認めている。

「ばか」かどうかを問われて「そう」と返答することは、明示的であるとも言える。しかし、ここに分類されたものは、明示的な表現を繰り返すことができたにもかかわらずそれをしなかった発話である。ここでも、「ばか?」という質問(4)や「あー、そっか」(8)という確認に対して、「そう、ばか」と応じることは十分可能であると考えられる。しかし、そうしなかったところに、明示性を隠そうとする話し手の意図を読み取ることができる。そして、そのような発話が相手への配慮を示そうとする場面で用いられていたことも事実である。例6で言うと、F01は、「ばかだ」という発言の直後から、その根拠を示して無責任な評価ではないことを伝えようとした(3, 12, 18)、「でも、がんばるよね、いろいろ」

と相手の肯定的な面にも言及したりしていることから、相手に配慮していることが分かる。

これが見られた場面は、相手が自身に否定的な発言をした直後や、例6のように先行する明示的な否定的評価について相手が確認や質問をしてきた際などであった。

例6 「明示的な表現の繰返しを避ける」ことによる否定的評価の例

- 1 F01「F02 あだ名」はねー(うん)、あのねー、別に今だから言うわけじゃないけどね、結構ばかだよく2人で大きな笑い。
- 2 F02 うそーく軽く笑いながら。
- 3 F01 だって、結構さ,,
- 4 F02<ばか?>|<|。
- 5 F01<あの>|>|ね、しっかりしてる、しっかりしてるけどく軽い笑い。
- 6 F02 すっごいフォローされてるな、あたしく若干笑い気味に)。[この間、F01は笑っている]
- 7 F02 えー、あ、くそう>|<|。
- 8 F01<そう>|>|そうそうそうそうそうく少し笑って)。
- 9 F02 あー(うん)、そっか。
- 10 F01 あ、これ開けた(く笑い)、これ開けた。[封筒を開けたことを通りがかった第三者に向かって話しかけている]
- 11 F01 そうそうそう。[F02 に向かって話している。この間、F02 は笑っている]
- 12 F01 そしてー,,[この間、F02 は笑っている]
- 13 F02 馬鹿とかいうく笑いながら)。
- 14 F01 なんだろうー。[この間、F02 は笑っている]
- 15 F02 くばかかー>|<|く笑いながら)。
- 16 F01 <いや、でも>|>|、がんばるよね、いろいろね。
- 17 F02 あー。

18 F01 でも、結構さー、なんか(軽い笑い)、OB用の葉書のさー、やつで、なんか、葉書の、あの印字がさ(うん)、斜めってってもさ(大きな笑い)そのままにしたりとかしてさく笑いながら)。

疑問詞での言い換え

否定的評価の意味を持つ語彙や表現を疑問詞に言い換えて、相手を否定的に評価するものである。例7は、週末に遊びに行く予定について話している場面である。ビール工場を見学すると試飲のサービスが付いてくるということを話している。試飲の際におつまみとしてピーナッツが出てくるということを聞いたF16は、他のおつまみを持参するということを提案する(5)。その考えがおかしいと感じたF15は「どうだろー、それは」と述べている。このF15の発話が否定的な評価を伝えていることは、それを聞いたF16が自己弁護するような発話を続けていることから分かる。F15は否定的な評価を伝える際、「おかしい」「だめだ」「変だ」等の明示的な語彙は使わず、「どうだろう」と疑問詞で言い換えている。

この表現方法が見られたのは、相手の提案の後や相手が自画自賛した後や、相手が所属しているチームやそのメンバーについて述べる時などであった。

例7 「疑問詞での言い換え」による否定的評価の例

- 1 F15 え、でも試飲でもー、何だっけ、ビール…ちゃう、15分かなんかで、飲み放題なの。
- 2 F16 あ、そうなの?。[驚いた感じで]
- 3 F15 そうだよ。
- 4 F15 そうそうそう。
- 5 F15 それで、ピーナッツがー、何か、1皿、1皿か1パックかあって、それ2人で1つを分け(合うの)く(く)。

- 6 F16 くえ、\}\} それって自分でおつまみ持ってちゃダメなのかな。
 →7 F15 どうだろー、それはく笑いながらくく2人で笑い。
 8 F16 欲しくなるでしょー、だって、せんべいとかく笑いながら。[この間、F15は笑っている]
 9 F16 え、うそ。
 10 F15 うん。
 11 F16 あ、そうなの？。

例え話

明示的な語彙や表現の内容を、例え話によって伝える評価の方法である。例8は、M01が所属する野球部の部員について話している場面である。M01はショートでは才能を発揮するがキャッチャーとしては戦力にならない部員について、練習中の捕球の姿勢が、周囲の部員にも気を使わせるほど土下座のようであったことを述べている(1)。それに続いて、M02は、「ちゃ、細すぎる」と述べ、補給の姿勢だけではなく、身体的な問題も指摘する。この評価については、M01から、体は細くても野球はうまいという趣旨の反論がなされている(5, 8, 10)。その反論の後、M01が再び土下座の話に戻り、朝から低姿勢で土下座を披露した部員の年齢が22歳であることを述べ、そのギャップから笑いをとろうとする。これを聞いたM02は、22歳という年齢に関連付けて、再び身体的な問題に戻ろうとする。その際、先行した評価のように「細い」という明示的な語彙は使わず、中学校3年生の体だ(14)、服のサイズが不釣り合いに大きく見える(18)、など例え話を述べる。これが部員に対する否定的評価であることは、一連の発話の中に「あんなフィジカルない」(13)「服、ぶかぶかだった」(17)などの否定的評価の発話があることと、それらの直後にM01がその部員を擁護する発話をしている(19, 21, 22)ところから分かる。

例8の例え話による否定的評価には、2つの働きが考えられる。一つ

は相手に対する配慮である。先行する「細い」という明示的な語彙を言い換え、非明示的にしたところに相手に対する配慮が表れていると考えられる。もう一つは、相手を笑わせる働きである。遊びとしての対立的言動の談話には、対立的な発話が立て続けになされるという特徴があることが指摘されている(大津 2004)。例8にもこのような特徴があり、M02がM01の発話をほとんど聞かずに立て続けに話している(13~18)。そのような中での明示的ではない発話は、敢えて間接的に修辭的に述べることによって相手を笑わせようとするものであったとも考えられる。この表現方法による否定的評価は、例8に挙げたものだけであった。

例8 「例え話」による否定的評価の例

- 1 M01 あいつがダイヤモンドの、あの中心におったら、ほんとみんなごめんなさいって感じでしょ? <笑いながら>。[この間、M02は笑っている]
- 2 M02 ちゃ、細すぎる。
- 3 M01 うん。
- 4 M02 しかもね、バントんときさー(うん)、“できるのー?” と思ったら、しっかりやとって、<お>K{,,
- 5 M01 <あー>}|、ちゃ、あいつうめーもん。
- 6 M02 ね。
- 7 M02 “あれ、できる” つって。
- 8 M01 ちゃ、あいつ、あんななりして、何気に(うん)うめーよ。
- 9 M02 ねー、な、何気に、できたね。
- 10 M01 うん。
- 11 M01 でー、22歳ね <2人で笑い>。
- 12 M01 朝から土下座しちゃったけどー(うん)、あれ22歳 <笑いながら>。[この間、M02は笑っている]
- 13 M02 22歳、あんなフィジカルないよね <笑いながら> <笑い>。

- 14 M02 まだ、中3だよな、フィジカル、だって、あれく笑いながら。
[この間、M01は笑っている]
15 M02 くぶとくくく、
16 M01 くあいくくくつはねーくくく笑いながら。
17 M02 く服、ぶかぶかくくだったもん。
→18 M02 あれ、おかんがさー、成長すると思ってLさ、L買った(く大きな笑い)、Mなのに、“あんた、でかくなるからL買っとくわー” っつって。
19 M01 ちがう、ちがう、ちが、あいつはゲーマーだもん。
20 M02 あ、そうなん？。
21 M01 基本的には。
22 M01 うん。

以上、データを分析した結果分かった7通りの方法を提示した。続いては、これらがどの程度見られたのか、数量を示す。

4.3. 明示的ではない否定的評価の表現方法の数量的結果

次頁の表2に、明示的ではない否定的評価の表現方法の数量的結果を示す。

表2から分かるように、最も多く見られたのは「否定的に捉えた行為の言語化」(29.8%)であった。次に多く見られた「否定的に評価する根拠となる事実・状況を指摘する」(26.2%)と合わせると、この2つの方法で、全体の50%以上を占めていることが分かる。また、数量的には少ないが、1つの発話文に複数の方法を合わせて用いられている場合もあった。

以上、本節では、明示的ではない否定的評価の表現方法について、データを分析した結果まとめられた7種類を提示した。次節では、以上の結果を考察し、本稿のまとめとする。

表 2. 明示的ではない否定的評価の表現方法の数量的結果

		頻度	%
4	否定的に捉えた行為の言語化	25	29.8
3	否定的に評価する根拠となる事 実・状況を指摘する	22	26.2
5	明示的な表現の繰返しを避ける	16	19.0
1	感情の表明	6	7.1
6	疑問詞での言い換え	5	6.0
2	話し手自身の状況を述べる	3	3.6
7	例え話	2	2.4
1+4		1	1.2
1+6		1	1.2
2+5		1	1.2
2+6		1	1.2
4+6		1	1.2
	合計	84	100

5. 考察とまとめ

相手や関連の事柄を否定的に評価する際、明示的ではなくそれを行うのは、相手に対する配慮と考えられることは2節において述べた。その働きについて実際の会話を分析したところ、一部には相手を笑わせるものも見られたが、大半が、相手への配慮を表すものであることが確認された。その具体的な表現方法として、今回分析したデータの中から7種類のものが明らかになった。以下、それらがどのようにして相手への配慮を示しているかということについて考察する。

相手を評価する際には、必ず相手に言及することになる。そのことが相手の立ち入られたくないというネガティブ・フェイスを脅かすことになる。本稿で示した明示的ではない否定的評価の表現方法には、これに対する配慮として2通りの方法があると言える。一つは、相手への言及を回避するもので、もう一つはネガティブ・フェイスを脅かす度合いを

緩和するものである。前者には、「感情の表明」、「話し手自身の状況を述べる」、「否定的に評価する根拠となる事実・状況を指摘する」である。これらはいずれも相手に直接に言及しないものであるだけに、相手に立ち入る度合いは極めて低くなる。一方で、相手に言及しつつ、その発話が相手のネガティブ・フェイスを脅かす度合いを和らげる方策として使われた表現方法も見られた。「否定的に捉えた行為の言語化」、「明示的な表現の繰返しを避ける」、「疑問詞での言い換え」「例え話」の4つである。これらは、明示的に述べることも可能な状況において、それをしないという表現方法である。相手に言及することで相手のネガティブ・フェイスを脅かしはするが、その度合いを低くするために明示的な表現が避けるという方法であった。

今回のデータでは、このような明示的ではない否定的評価の発話が、全体の37.0%見られた。日本語の評価の語彙に関しては、性向語彙⁴⁾を分析した室山(2001:36-37)が、「プラス評価に所属する語彙に対して、マイナス評価に所属する語彙は、4ないし5倍量」存在することを指摘し、これを「マイナス評価の性向に関して、それだけ明確な概念化の集合意識が働いたものと解することができるであろう」としている。このように、日本語では否定的な評価が明確に概念化されているが、今回のデータからは、否定的評価の発話は常に明示的ではないということが分かった。そして、そこには相手に対する配慮が表れているということを実際の会話を分析することにより示した。これを第二言語学習の観点から考察すると、円滑なコミュニケーションのためには明示的な否定的評価の表現を学習するのみでは不十分であることが示唆される。日本語母語話者の発話の真意を理解するためには、明示的ではない表現方法についても知識を持つておく必要がある。また、相手を否定的に評価する際、明示的ではない表現方法に関する知識が十分ではなく、明示的にしか表現できないことで、相手のネガティブ・フェイスを強く脅かしてしまうことも懸念される。今回のデータでは、「否定的に捉えた行為の言語化」と

「否定的に評価する根拠となる事実・状況を指摘する」という2つの方法によって、明示的でない否定的評価の発話の50%以上が表現されていた。明示的ではない否定的評価の表現方法について学習者に示す際には、これらの知識の教授を優先させることが、効率的であると考えられる。ただし、これとは別に難易度も考慮する必要があるだろう。比較的容易であると考えられるのは、「明示的な表現の繰返しを避ける」「疑問詞での言い換え」である。なぜならば、これらが言い換えや繰返しを控えるという、言語表現レベルの問題だからである。一方で、「否定的に捉えた行為の言語化」と「否定的に評価する根拠となる事実・状況を指摘する」などの場合、話し手がメタ的に認知している状況の中から言語化するものを特定し、それを言語化するという作業が行われるため、比較的難易度が高くなると考えられる。コミュニケーション教育において、これらをどのように扱うかは、今後、他言語との対照研究などの視点も含めて追求する必要がある課題である。

以上、本稿では、明示的ではない否定的評価の表現方法を分析し、そこに働いている配慮の意識を明らかにした。そして、このような表現方法に関する知識について、第二言語学習の観点から必要性を論じた。本稿では音声データのみを用いて分析を行ったが、今後は非言語情報も含めた分析が必要であろうと考えている。

付録： 本稿で用いた記号凡例（宇佐美 2003を一部簡略化して記載）

- 。 [全角]⁶⁾ 1発話文の終わりにつける。
- 、 発話文の途中に相手の発話が入った場合、前の発話文が終わっていないことをマークするためにつけ、改行して相手の発話を入力する。
- 、 ①[全角] 1発話文および1ライン中で、日本語表記の慣例の通りに読点をつける。
②発話と発話のあいだに短い間がある場合につける。
- ‘ ’ ①複数読み方があるものを漢字で表す場合、特別な読み方で発せられた

ことを示すために’’に入れて示す。

②音の表記だけでは意味が分かりにくい発話は,’’の中に正式な表記をする。

“ ” 発話中に、話者及び話者以外の者の発話・思考・判断・知覚などの内容が引用された場合、その部分を” ”でくくる。

? 疑問文につける。

… 文中、文末に関係なく、音声的に言いよどんだように聞こえるものにつける。

< >|< 同時発話されたものは、重なった部分双方を< >でくくり、

< >|> 重ねられた発話には、< >の後に、|<をつけ、そのラインの最後に句点「。」または英語式コンマ2つ「,,」をつける。また重ねた方の発話には、< >の後に、|>をつける。

[] 文脈的情報。その発話がなされた状況ができるだけわかりやすくなるように、音声上の特徴(アクセント、声の高さ、大小、速さ等)のうち、特記の必要があるものなどをそのラインの最後に記しておく。

() 短く、特別な意味を持たない「あいづち」は、相手の発話中の最も近い部分に、()にくくって入れる。

< > 笑いながら発話したものや笑い等は、< >の中に、<笑いながら>、<2人で笑い>などのように説明を記す。

[] [全角]トランスクリプトを公開する際、固有名詞等、被験者のプライバシーの保護のために明記できない単語を表すときに用いる。

『 』 視覚上、区別した方が分かりやすいと思われるものを『 』でくくる。

注

(1) 話題を記した紙を封筒に入れておき、会話開始後、任意の時点において封筒を開けるよう依頼した。その話題では話しづらい、話題について話すことがなくなった、等の場合には、渡した話題を離れてもよいと伝えた。

- (2) BTSJ では、「実際の会話の中で発話された「文」という意味で「発話文」という用語を用い、基本的な分析の単位とする(詳しくは宇佐美 2003を参照)。
- (3) 以下、会話例は、宇佐美(2003)を簡略化して提示する。
- (4) 「地域社会の成員の生まれつきの性格や日ごろの振舞い、人柄などを評価の観点から捉えて表現する言葉のまとまり」である(室山 2001: 23)。
- (5) 宇佐美(2003)では、検索の際の便宜を図り、各記号は「半角」で統一することを原則としている。ただし、凡例中に「全角」とある記号は、「全角」で表記する。

参考文献

- 宇佐美まゆみ(2003)「改訂版：基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese:BTSJ)」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』, 平成13-14年度 科学研究費補助金 基盤研究C(2)(研究代表者：宇佐美まゆみ), 研究成果報告書, 4-21.
- 大津友美(2004)「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネスー「遊び」としての対立行動に注目してー」『社会言語科学』, 第6巻第2号, 44-53.
- 筒井康隆(1937)「悪口雑言罵詈譏私論」『月刊ことばの宇宙』 8月号, テック言語教育事業グループ, 23-30.
- 日本語記述文法研究会編(2003)『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』, くろしお出版.
- 室山敏昭(2001)『「ヨコ」社会の構造と意味』, 和泉書院.
- 山田暁生(1985)「子どもと悪口ーその意識と実態」『言語生活』 第三九八号, 筑摩書房, 62-68.
- Brown, P., & Levinson, S. C. 1987. *Politeness: Some universals in language*

usage. Cambridge: Cambridge University Press.

Goodwin, C. and Goodwin, M. H. 1987. Concurrent operations on talk: Notes on the interactive organization of assessments. *IPrA papers in pragmatics*. 1–54.

Martin, J. R. and White, P. R. R. 2005. *The language of evaluation*. New York: Palgrave Macmillan.

【キーワード】 否定的評価 表現方法 ポライトネス
配慮 コミュニケーション教育

Inexplicit Ways of Expressing Negative Evaluation

SEKIZAKI Hironori

This study is a survey on negative evaluation utterances found in natural conversation between Japanese undergraduate students at Japanese universities whose relationships are very close. The analysis was done regarding the way of inexplicitly expressing negative evaluation that are referring to their interlocutors and their actions, utterances, recognition, people or things they like.

The result showed that 63.0% of utterances were explicit, whereas the rest are inexplicit. This study revealed that there are 6 ways of expressing inexplicit negative evaluation, and all of them have function of Negative Politeness or Off Record (Brown & Levinson 1987). The necessity of knowledge about these expressions from the view point of second language learning was discussed.